

# 英語教育と地球市民学の融合 —英語教育学教員と地球市民学教員の協働による CLIL 教科書開発—

阿川敏恵・山本達也・鈴木直喜・辰巳頼子

## 要旨

本稿は、2021年にスタートした新カリキュラムにおける地球市民学科英語科目のうち、「Global Citizen and Environment」、「Global Citizen and Politics」、「Global Citizen and Religion」のオリジナル教科書開発を報告する。地球市民学科における新カリキュラムのねらいと、新カリキュラムにおける英語関連科目の位置づけを説明したのち、内容言語統合型学習 (CLIL: Content and Language Integrated Learning) と新カリキュラム英語の整合性ならびに、上記3教科におけるオリジナル教科書開発の必要性を述べる。次にオリジナル教科書の構成と開発の過程を報告する。教科書の構成の紹介においては、教科書のデザイン段階でCLILがどのように組み込まれたかを詳しく述べる。また、開発過程の報告においては、教科書開発に関わった教員、外部ライター、外部イラストレーターそれぞれが果たした役割を紹介したのち、1) 全体計画の決定、2) キーワードの選定と資料の準備、3) リーディング・パッセージの執筆、4) アクティビティ作成、5) コラムの執筆、5) 編集について詳述する。最後にオリジナル教科書開発で得られた成果を述べ、今後の展開を示す。

## Integration of English language education and global citizenship studies: Development of CLIL textbooks

Toshie Agawa Tatsuya Yamamoto Naoki Suzuki Yoriko Tatsumi

## Abstract

This report introduces the process of developing content and language integrated learning (CLIL) textbooks for second-year Global Citizens Studies (GCSs) majors at Seisen University. Three textbooks for Global Citizen and Environment, Global Citizen and Politics, and Global Citizen and Religion—were developed, tailoring them to the new curriculum the university launched in 2021. One of the main aims of the new departmental curriculum is to cultivate GCS students' knowledge about and ability to apply the basic concepts in GCSs in both English and Japanese. Four professors at the university and an outsourced writer collaborated on the project. Three of the professors were content experts (i.e., environment, politics, and religion) while the other was a second language acquisition (SLA) professor. The outsourced writer worked at a company offering English as a foreign language (EFL) classes, courses, and materials to learners in various age groups in Japan. In the project, each CLIL textbook was developed through the collaboration of one of the content professors, the SLA professor, and the material writer. The SLA professor and the material writer

worked on all three textbooks while content professors worked on only the textbook related to their specialty. At the launch of the project, the SLA professor provided other members with basic information and guidelines about CLIL. Content professors then offered possible topics for lessons, brief information, and key words about the topics. The material writer subsequently created reading passages (i.e., stories) on the topics. The content and SLA professors checked the stories, which the writer revised, sometimes multiple times. The material writer and SLA professor developed activities and tasks. This report details the collaboration among the project members and discusses challenges experienced during the process. The report concludes with future plans and directions, such as the examination of students' and teachers' reactions to the textbooks and possible improvements to them.

## 1. はじめに

清泉女子大学では、2021年4月の新カリキュラムのスタートにともない、各学科で様々な新しい取り組みが取り入れられ、実施されている。地球市民学科では全面的にカリキュラムを見直し、英語関連科目についても大きな変更があった。地球市民学科の英語関連科目の改革のひとつに、英語で地球市民学の専門分野を学ぶ「Global Citizen and ●●（ここには、政治、文化、宗教、環境、平和、企業、法など地球市民学科が専門科目として扱う14のテーマが入る）」の導入がある。これら14科目のうち、既存の教科書が見つからなかった、または既存の教科書に適切なものがなかった「Global Citizen and Environment」、「Global Citizen and Politics」、「Global Citizen and Religion」については、オリジナル教科書を開発した。本稿はこれら3科目のオリジナル教科書開発報告を目的とする。以下に1) 地球市民学科における新カリキュラム、2) 新カリキュラムにおける英語関連科目の位置づけ、3) 内容言語統合型学習（CLIL: Content and Language Integrated Learning）、4) オリジナル教科書開発の必要性、5) 開発の過程とその成果を述べる。

## 2. 地球市民学科における「2021年新カリキュラム」のねらい

2001年に創設された清泉女子大学地球市民学科は、学科創設から20年を迎える節目のタイミングでカリキュラムの全面的な見直しをおこない、ゼロベースで新たなカリキュラムを構築した。新規にカリキュラムを組み上げるにあたっての問いは、「変化が激しく不確実性が増す世界において、地球社会が抱える問題に対して主体的に、かつ具体的な働きかけができるチェンジメーカー（Active Global Citizen）を育成するためにどのような高等教育を展開するべきか」というものであった。

検討の際に考慮した要素は多岐にわたるが、在学中のみならず「卒業後」を視野に入れ

た上での英語運用能力の育成が必要となる社会的背景として、以下の3点を指摘しておきたい。

第1に、カリキュラムを通して獲得する能力の中に「変化する社会への対応」という要素をいかにして織り込むのかという点である。学生が大学を卒業してから実社会で活躍する年数は長い。最低でも50年間、社会の中で様々な役割を果たすことが想定される。その間、理解しておくべき知識や情報も、必要とされる能力も変化していくことになる。

こうした社会では、ある特定の段階（たとえば卒業時）において保持している知識や資格を抛り所として晩年までのキャリアを全うすることが難しくなる。どう変化するか予測を事前にたてるのが難しく、変化のスピードも速い世界では、自身が保持する知識や能力も状況に応じて変化させていかななくてはならない。そのため、地球市民学科の新カリキュラムでは、卒業時に備えておくべき知識量を満たすことと同時に、自律的に学び続けるために必要な素養や意識を育成するという点にも重きをおいている。軸としたのは、コンテンツ中心から、コンピテンシー中心のカリキュラム編成（佐藤他, 2021）という考え方である<sup>(1)</sup>。

第2に、一人ひとりの能力の向上にとどまることなく、他者と協働するための能力の獲得にも意識を向けてカリキュラムの構築をおこなったという点である。地球市民学科が取り組もうとする現代的な社会課題は、どれも1人の力で解決することは難しい。他者との協働をどうおこなうかが、取り組みの成否を決めることになる。

また、近年では、日本経済団体連合会（経団連）も新卒一括採用や終身雇用制度を軸とした「日本型雇用システム」の見直しを主張しはじめている（朝日新聞, 2022）。これまでの「メンバーシップ型」に代わって導入されはじめているのが「ジョブ型」の人事制度である（朝日新聞, 2022）。こうした労働環境の変化は、雇用の流動性を高めることになる。これからの卒業生は、今以上に、多様なバックグラウンドを持つ人々と協働しながら仕事を進める機会が増えると考えられる。

第3に、いかにして高等教育が取り扱う「学問的な知識」を、現場における「実践的な知恵」へと変換していく能力を向上させられるのかという点である。この課題を担保するために、新カリキュラムでは「インプット」と「アウトプット」を組み合わせた制度設計をおこなうと共に、両者の比率配分にも注意を払った。

一般的に高等教育の現場では、インプットの割合が多くを占め、アウトプットの機会は限定的である。仮にアウトプットの機会があったとしても、教室内か、社会と関わるとしても、あらかじめ設定された枠の中でおこなわれるケースが大半を占める。

この点、地球市民学科の新カリキュラムは、実際に人びとが生活を営むリアルな現実社会にておこなう「卒業研究プロジェクト」を4年間の学修の集大成としてのアウトプット課題として必修化した。学生は、3年次と4年次の2年間をかけて自身の卒業研究プロジェクトに取り組み、選択した社会課題について学術的な卒業論文を執筆するとともに、プロ

プロジェクトの成果を卒業プレゼンテーションとして発表することが求められる。この時、プロジェクトの実施場所は、学生自身の問題関心と当事者性に依りて設定され、国内外を問われることはない。

重要なポイントは、これら3つの要素を別々に捉えるのではなく、それぞれを有機的につなぎ合わせることで効果が発揮されるという点にある。第1のポイントである自律的な学修の継続においても、第2のポイントであるグローバル社会における協働においても、第3のポイントである理論と実践との継続的な反復プロセスにおいても、英語が果たしている役割は大きい。したがって、これらを有機的につなぎ合わせていくためには、英語の運用能力が不可欠であり、この差が、最終的な成果の質にも影響をおよぼすことになる。

以上のような問題意識も組み込んだ新カリキュラムのディプロマポリシー (DP) は、次の5つの要素から構成されている。「グローバル社会が抱える課題を、自分自身が取り組むべき、身近な問題として設定し (DP1:批判的思考力)」、「その問題を解決するために、他者と協働しながら (DP2:関係構築力)」、「創造的かつ具体的な解決策を提示・実践し (DP3:創造的思考力)」、「一連の過程で、必要な情報を効果的に発信することができ (DP4:情報発信力)」、「それらに必要な日本語および英語の運用能力 (DP5:言語運用能力)」を有するという5点である。

	1年次	2年次	3年次	4年次
前期	<b>新生入生合宿</b> Growth Mindsetの獲得 4年間のAcademic Planning			
夏	<b>生徒→学生</b> 学術的な思考の概念や思考のツールおよび言語などスキルの習得	<b>ファー・トランスファー能力の獲得</b> 地球社会系の学術的専門知識の習得	<b>研究プロジェクト</b> ゼミ教員の指導を受けつつ、卒業プロジェクトの立案と実施 将来のキャリアを見据えながらのFWや海外インターン等の経験も含む	
後期	個人プロジェクト発表会	グループ・プロジェクト発表会	プロジェクト中間発表プレゼンテーション	卒業論文卒業プレゼンテーション
春				

図1 地球市民学科における4年の流れのイメージ



図2 地球市民学科新カリキュラムの概要 (清泉女子大学, 2022, p. 34)

### 3. 新カリキュラムにおける英語関連科目の考え方と構成

ディプロマポリシーにおける英語の位置付けとして重要なのは、「それらに必要な英語の運用能力」としている点である。単に特定の英語外部試験で何点を取得するといった英語単体の能力が目的化されているのではなく、現実社会の課題に対する実践的な試みをより望ましいものにするための英語運用能力が意識されている。

こうした英語運用能力の捉え方は、在学中のみならず卒業後のキャリア形成をも意識している。前節で指摘した、「変化する社会」に対応するために学び続けるという意味と態度、多様なバックグラウンドを持つ人々との「協働」、「学問的な知識と実践的な知恵」を組み合わせた具体的な行動それぞれにおいて、英語の運用能力は重要な意味を持つ。地球市民学科が扱う学問分野において最新の知見は、ほとんどの場合、英語で提供されている。新しい知識や情報を学び続け、時々社会に求められる能力を磨き続けようと思うならば、英語の使用が必須となる。同様に、協働する相手との意思疎通や、プロジェクト遂行の現場で英語が「共通語」として使われるケースは多い。仮に「現地語」の修得が求められる場面においても、英語を介して現地語を学ぶという方法が一般的となっている。

地球市民学科の新カリキュラムは、「グローバル社会系」、「コンセプト・スキル系」、「プロジェクト系」の3つに大別されるが、英語関連科目は全てのカテゴリにおいて用意されている。入学後、2年次前期までの必修科目である「English for Global Citizens」と、2年次の夏季休暇中に開講される必修科目「国際協力のための英語」は、コンセプト・スキル

系に分類されている。

コンセプト・スキル系の英語科目は、英語をスキルとして捉え、英語4技能の向上を目的としている。ただし、4週間の日程でおこなわれる「国際協力のための英語」の最後の1週間は、国際協力機構（JICA）の協力も得てJICA研修施設にておこなわれ、そこでは国際協力の現場も意識しながら、コンテンツとスキルとを組み合わせた英語教育が展開される。客観的な英語4技能の運用能力については、「国際協力のための英語」の終了時に外部試験（TOEICの4技能試験）を受験することで測定される。

プロジェクト系科目には、選択科目として「GCS インターンシップ」が用意されている。「国際協力のための英語」もしくは、選択科目として設置されている「国際協力のための外国語」を履修した後で、英語および現地語を使いながら、海外の企業やNGO等でのインターンシップをおこなうことが1つのモデルコースとして想定されている（図2参照）。

本稿の主題である英語オリジナル教科書は、「Global Citizen and ●●（ここには、政治、文化、宗教、環境、平和、企業、法など地球市民学科が専門科目として扱う14のテーマが入る）」の教科書として開発されたものであり、これらはグローバル社会系科目として位置付けられている。学生は、2年次後期の必修科目として2単位を、卒業までに追加で2単位以上を修得する必要がある。

コンセプト・スキル系ではなく、グローバル社会系に属するこれらの科目は、「英語を」学ぶのではなく、「英語で」専門科目を学ぶものである。グローバル社会系の中には、学科に所属する専任教員の各専門分野を学ぶ「専門事例：地球市民と●●（ここには、英語科目と同一の14のテーマが入る）」が用意されている。英語科目と専門事例とは連動しており、英語科目はこれら専門事例の「入門科目」として位置付けられる。学生は、原則として各専門分野の入門的知識や考え方を「Global Citizen and ●●」にて英語で学んだ上で、専門事例を通してより深く学ぶことになる。

こうした位置付けにある教科書として、専門科目の入門的な内容を英語で理解するという目的を達成しつつ、取り扱うコンテンツに日本の事例を積極的に取り入れるという工夫もおこなった。この狙いとしては、以下の2点が挙げられる。

第1の狙いは、日本について英語で学ぶというものである。英語というフィルターを通して日本を学ぶことは、学生にとって日本語で学修するのとは異なる視点から日本を捉え直す機会となる。また、学生が在学中や卒業後に、日本のことを英語で説明する機会に備えて、各分野の専門用語や表現方法をあらかじめ英語で理解しておくという目的もある。

第2の狙いは、地球市民学科への留学生が、英語で日本について学ぶ機会を提供するというものである。キャンパス内の学生の多様性を増すためにも、今以上に留学生の受け入れ人数を増やすことが望まれる。留学生にとって魅力的な授業を備えるという観点からも、日本の事例を通して専門科目が学べる教科書を作成することとした。授業内で留学生とのディスカッション機会が増えるということは、当然ながら日本人学生にとっても貴重な教

育機会となる。

#### 4. 内容言語統合型学習 (CLIL) と「Global Citizen and ●●」の適合性

前項で述べたように、2年次後期以降、学生はグローバル社会系に属する「Global Citizen and ●●」の授業において「英語で」英語以外の科目内容を学ぶことになる。これはいみじくも、近年英語教育研究・実践分野で注目を集めている内容言語統合型学習 (CLIL: Content and Language Integrated Learning) の枠組み (笹島, 2011; 渡部他, 2011) に沿ったものである。CLIL とは、学習者の母語 (本学の授業では主に日本語) 以外の第二言語 (ここでは英語) を使用しながら、言語と教科内容の両方の学習を目指す言語教授法であり、いわゆる「4つのC」を柱としている (詳細後述)。近年は複数の出版社から CLIL 教材の出版が相次ぎ、様々な分野について英語で学ぶことのできる環境が作られつつある<sup>(2)</sup>。

「4つのC」とは「内容 (Content)」、「言語 (Communication)」、「思考 (Cognition)」、「協学 (Community)」であり、これらが有機的に結びついて CLIL を構成している (笹島, 2011; 渡部他, 2011)。

「内容 (Content)」はその名の通り、授業で取り上げるトピックや内容のことで、CLIL ではコンテンツを中心に置き、それらについての新しい知識、スキル、理解が得られる授業をデザインする。「Global Citizen and ●●」の場合、「●●」にあたる分野に関する知識、スキル、理解を促進することがコースの目標のひとつであり、CLIL の導入によってこの目標の達成が期待できる。

「言語 (Communication)」は、1) 取り上げるテーマやトピックの理解に直結する言語材料やスキルと、2) 英語でコンテンツを学ぶ際に必要な表現や学習スキルのことである (渡部他, 2011)。具体的に言うと1) は各レッスンの重要語句や文法事項などで、2) についてはノートの取り方や議論の方法、グループワークの進め方などがこれにあたる。上記2) の表現やスキルはテーマやトピックが変わっても使用できるため、コースを通じて繰り返し用いながら1) の言語材料や文法項目を使用することにより、言語習得を推進してゆく。

「思考 (Cognition)」は、様々なレベルの認知活動である (渡部他, 2011)。Bloom's Taxonomy (Anderson & Krathwohl, 2001) は、教師が授業を通して学習者に教えるべき事柄を6つのカテゴリに分類しており、それらは認知レベルの低いものから順に remembering (覚える)、understanding (理解する)、applying (応用する)、analyzing (分析する)、evaluating (評価する)、creating (創造する) である。CLIL は、認知レベルの低いものだけでなく、認知に負荷のかかる活動への取り組みを学習者に求める (渡部他, 2011)。「Global Citizen and ●●」は、現実社会の課題に対する実践的な試みに貢献できる英語運用能力育成を視野にいれていることから、言語材料についての知識を身に付ける (remember, understand) だけでなく、学んだトピックについてそれを実社会にどう応用 (apply) できるかを考えたり、

分析をおこなって評価 (analyze, evaluate) したり、新しい提案を考案 (create) したりすることを求める CLIL の導入が適している。

「協学 (Community)」とは、他者と協働して学ぶことを指す (渡部他, 2011)。授業内でクラスメートとの議論を通じて共に学んでいくことも「協学 (Community)」に当たるし、教室外、さらには学外の人との協力を得ながらプロジェクトを進めることも「協学 (Community)」である (渡部他)。地球市民学科の新カリキュラムにおいては、多様なバックグラウンドを持つ人々との協働が強調されており、CLIL が、新カリキュラムにおける英語関連科目との親和性が高いことが、ここでも示されている。

以上のことから「Global Citizen and ●●」の科目群には CLIL を導入が適していると判断し、14 すべての専門分野において、CLIL を導入することとした。近年市販の大学向け CLIL 英語教材が充実してきていることから、まずは市販の CLIL 教材の中から授業に使用する教科書を選定することとした。

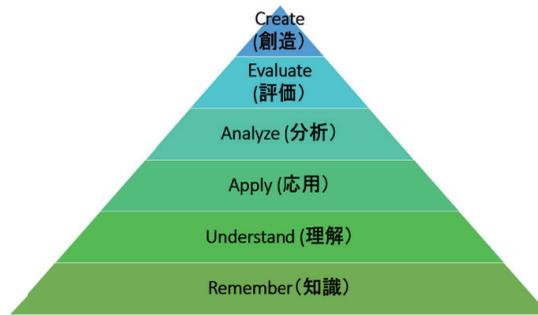


図3 Bloom's taxonomy (Anderson & Krathwohl (2001) をもとに著者作成)

## 5. オリジナル教科書開発の必要性

「Global Citizen and ●●」の教科書選定にあたっては、「●●」の部分で専門とする地球市民学科教員 (以下コンテンツ教員) と、英語教育学を専門とする教員 (以下 SLA 教員) とでおこなった。教科書選定時期は、CLIL 英語教材の新刊発行が盛んな時期でもあった。SLA 教員は CLIL 英語教材に比較的アクセスしやすいことから、まずは新刊の CLIL 教材をコンテンツ教員に紹介し、分野の専門家の見地から内容を精査してもらおうという手順を踏むこともあった。また、コンテンツ教員が独自にその分野に相応しい教材を選定することもあった。

この過程の中で2つの問題が浮上した。1つめは、分野によっては市販教材が存在しなかったことである。例えば、全編で宗教を扱った市販 CLIL 英語教材は、選定に関わった教員の知る限り存在しなかった。2つめは、コンテンツ教員のみからみて、既存の教科書

が必ずしも相応しいといえないケースがあったことである。市販教材には良書が多いものの、なかには専門家の目から見てデータの取り扱いに疑問点があったり、ややステレオタイプの記述がみられる教材があったりして、採用がためられた。

上記の問題に対処するためには、自分たちで教科書を準備するしかなく、「Global Citizen and Environment」、「Global Citizen and Politics」、「Global Citizen and Religion」の3科目について、オリジナル教科書を開発することとした。

## 6. オリジナル教科書の開発

### 6.1 参加者

教科書開発に関わったのは1科目につき3名または4名で、表1のとおりである。

表1 教科書開発参加者

	Environment	Politics	Religion
SLA教員	○	○	○
コンテンツ教員A	○		
コンテンツ教員B		○	
コンテンツ教員C			○
外部ライター	○	○	○
外部イラストレーター	○		

SLA教員と外部ライターは全ての教科書の開発に関わった。外部ライターに開発の一部を委託したことにより、教員への負担を軽減し、少人数チームでの開発を実現することができた。外部ライターは、以前から地球市民学科の「国際協力のための英語」の運用に関わっている企業の社員だった。この企業に教材作成の実績があることから、採用した。コンテンツ教員は、Environment, Politics, Religionそれぞれの教科書について、その分野を専門とする教員が1名ずつ関わった。また、Environmentの教科書についてのみ、外部イラストレーターに作業を発注した<sup>(3)</sup>。

### 6.2 教科書開発の流れ

教科書開発は、以下の流れで進められた。

1. 全体計画と単元の構成の決定
2. トピック、キーワード／コンセプト（キーワード）の選定と資料の準備
3. リーディング・パッセージ(story)の執筆
4. アクティビティの作成
5. コラムの執筆

## 6. 編集、校正

以下、流れに沿って詳述してゆく。

### 6. 2. 1 計画・単元構成の決定

作業フローや締め切りの設定などといった全体の計画は、SLA 教員から提示したものをコンテンツ教員ならびに外部ライターの同意を得て決定した。またこの段階で外部ライターに対して、CLIL の基本概念の説明ならびに CLIL 教科書開発にあたって注意して欲しいことを書面にまとめて提示した（付録参照）。

単元の構成は、市販の教科書の一般的な流れを念頭に、SLA 教員が独自で考案した。その際、CLIL の「4つのC」が入るようにした。表2に単元の構成（教科書どおりの提示順）と「4つのC」の対応を示す。なお、キーワード／コンセプト（以下キーワード）の日本語訳とコラム以外は全て英語で作成することとした。

表2 単元の構成と4つのCとの対応

構成	概要・説明	4つのC
単元番号・タイトル・写真	単元の内容と関係のある写真の提示。	
ウォームアップ・クエスチョン	単元の内容と関係があり、比較的話しやすい質問。導入アクティビティ。	内容、言語、協学、思考（知識・理解）
語彙	Storyに出てくる英語の語彙と日本語の定義をマッチするタスク。	言語、思考（知識）
リーディング・パッセージ (Story)	単元のトピックに関する文章。キーワード／コンセプトは太字にしてある。	内容、言語、思考（知識・理解）
内容確認問題	T/F問題が中心。Environmentには図表を完成させるものも取り入れた。	内容、言語、思考（知識・理解）
クロスワード・パズル	キーワード／コンセプトのクロスワード。	言語、思考（知識）
ディスカッション・クエスチョン	単元の内容に関する、やや深い質問。	言語、協学、思考（分析・評価・創造）
ショート・スピーチ	単元の内容に関するスピーチのトピック。学生は2分程度の発表をおこなう。	言語、協学、思考（分析・評価・創造）
クオート・アंकオート	単元の内容に関する引用句とそれに関するディスカッション・クエスチョン。	言語、協学、思考（分析・評価・創造）
コラム	キーワード／コンセプトの中から、学生にとって分かりづらいものなどを選んで解説したり、問いかけをしたりする日本語の文章。	内容、思考（知識・理解・分析）
キーワード／コンセプト	英日で提供。	言語、思考（知識）

単元の構成にあたり、当初はキーワード一覧を単元の最初に置くことを検討していた。一般的に英語教科書では、まず語彙の導入があり、続いてリーディング・パッセージが提

示されるからである。しかし検討の末、キーワードは単元の最後に掲載することとした。キーワードを単元の最後に移した理由は以下の3つである。1) 単元によってはキーワードの数が多く、この一覧を最初に提示されることで、学習者の取り組みに対する動機づけを低下させる懸念があった。2) すべてのキーワードがリーディング・パッセージ (story) (以下 story) で使用されているわけではないこと (詳細後述) から、全キーワードを story の前に提示することが、story の内容理解に直結するとは限らなかった。3) story を理解するために知っておく必要のあるキーワード以外の語彙が相当量あり、これをカバーするアクティビティ (「語彙」アクティビティ) が必要と判断された。これらの理由から、キーワードと「語彙」アクティビティの両方でなく、story の内容理解を直接的に助ける「語彙」アクティビティ<sup>(4)</sup>を story の前に設けることとし、キーワード一覧は単元の最後に配置した。

キーワードについては、単元を通して太字にして目立たせることにした。また、story の前の指示文の中でキーワードが太字で表記してあることを告知して、学習者に最終ページを参照することを促したり、story 内に含まれないキーワードを学習できるアクティビティ (詳述後述) を別に設けたりすることとした。

## 6. 2. 2 トピック、キーワード/コンセプト、資料

コンテンツ教員がそれぞれ自分の専門分野を扱う教科書について、単元で取り上げるトピックを決定した。Environment と Politic については13単元を設けることとし、Religion については10単元を設けることとした<sup>(5)</sup>。単元のトピック (タイトル) が決定した後コンテンツ教員は、各トピックに関連したキーワードをリストアップした。このリストは、各分野の入門的知識や考え方に必要な内容を理解するのに必要な語句であり、「Global Citizen and ●●」が「専門事例」への橋渡しの役割を果たす上で重要なものである。キーワードのリストは、日本語の定義を添えて外部ライターに提示した。また、コンテンツ教員は外部ライターに対して各分野の資料も提供した。

## 6. 2. 3 リーディング・パッセージ (story) の執筆

Story のねらいは、コンテンツについての英文を読むことで、コンテンツ自体の知識と理解を深めると同時に、それを英語で理解する力をつけることである。コンテンツと言語を同時に学習できるように意図されているところが、CLIL 教科書ならではの特徴である。また、story の後には、story が扱う内容についてのディスカッションやスピーチをおこなうアクティビティが準備されており、story が、より高次の認知活動を展開するための土台としての役割も担っている。

Story は、キーワードのリストと資料を参考に、外部ライターが執筆した。執筆にあたっては、できるだけ story 内にキーワードを含めるよう依頼したが、無理に含めて文章が不

自然になることは避け、story 内で扱いきれないキーワードについては、同単元内の別アクティビティ（クロスワード・パズル）で学習できるようにした（詳述後述）。

ライターが執筆した第1ドラフトがそのまま最終版となることはなく、ライターと教員の間で複数回のやりとりが必要であった。流れとしては、まず第1ドラフトにコンテンツ教員が目を通し、内容的な視点からコメントした。内容的なコメントの中には、強調して欲しい点の変更や、読み手に誤解を与えないための書き方の変更依頼などがあった。内容が固まったのち、SLA 教員が言語的な視点からコメントをおこなった。言語的なコメントの中には、使用語彙や構文の難易度や、1文の長さについてのものがあった。このように、何度か修正を経て story は完成した。ひとつの story の長さは 400 から 600 単語程度となった。

#### 6. 2. 4 アクティビティ作成

Story 完成後に、アクティビティが作成された。ここでアクティビティとは、表2中の「語彙」「内容確認問題」「クロスワード・パズル」「ディスカッション・クエスチョン」「ショート・スピーチ」「クオート・アンクオート」を指す（各アクティビティの概要は表2を参照）。3冊中最初に開発が開始された「Global Citizen and Environment」の教科書については、SLA 教員がアクティビティを作成し、他の2教科書については外部ライターがおこなった。これは、SLA 教員が作成したアクティビティの構成と例を外部ライターに示すことで、残る2つの教科書開発をスムーズに進める狙いがあった<sup>6)</sup>。

Story と直接的な結びつきがあるアクティビティは「語彙」と「内容確認問題」である。「語彙」では、story 中に含まれる比較的難易度の高い語彙を取り上げて、学生の story の理解を助けることをねらいとした。語彙の難易度の判断には『ジーニアス英和大辞典』（小西他、2001）を用いた。キーワードについては、単元の最終ページに英日で示してあることから、「語彙」アクティビティに含めなかった。ただし、既出の（過去の単元で提示された）キーワードについては「語彙」アクティビティに含め、重要語彙を繰り返し目にするることによる定着を図った。

「内容理解問題」は、story の内容理解を確認するためのものである。主に True/False 問題を作成したが、Environment の教科書には story の内容に沿って図表を完成させるタイプのもも作成した。Politics と Religion については、図表の作成に伴う費用の関係や、自由度の高い図表の完成タスクが外部ライターにとって取り組みづらかったことから、T/F 問題のみとなった。T/F 問題を採用したのは、比較的習熟度のばらつきのある学生に広く対応できると考えたことと、CLIL の4つのCのいくつかをカバーできると考えたからである。習熟度の低い学生にとって2択である T/F 問題は比較的解答しやすく、心理的負担も軽い。Story 全部は理解できなくとも、T/F 問題で問われた部分を探して読むことで、スキニングの練習ができ、範囲を絞った上で解答に関わる部分の言語材料に注目して

しっかり読む練習ができる（4つのCの言語に対応）。またこのことが、内容全体のポイント理解につながる〔思考（知識・理解）〕。一方、習熟度の高い学生に対しては、解答がFの場合の理由や正しい答えを考えさせることによって、storyをさらに読み込み、読解力をつける（4つのCの言語に対応）とともに、内容理解をより深めることができる〔思考（知識・理解）〕と期待された。

Environment教科書に採用した、ストーリーの内容に沿って図表を完成させる問題は、文字情報を視覚的に捉えなおさせることによる内容の理解確認と整理を狙ったものである。多重知能の考え方（竹内, 2007）にもとづき、文字のみよりも図表を使用した方が理解が促進されるといった、認知スタイルを持つ学習者に対応する目的もあった。

「内容理解問題」に続いて、クロスワード・パズルを配置した。これは、単元のキーワードの定義を英文で読み、パズルを完成させるというものである。6.2.3で述べたように、story執筆にあたり外部ライターには、不自然にならない程度にstory内でキーワードを使用するよう依頼した。CLILの特徴のひとつに、オーセンティックな教材を使用する（笹島 2011; 渡部 2011）ことがあり、無理にstoryを操作してまでキーワードを詰め込むことは避けたかったためである。この結果、storyに全てのキーワードを含めることはできなかったが、これを補完する手段として、同単元内にクロスワード・パズルを設け、学生の学習機会を確保した。

単元の後半には「ディスカッション・クエスチョン」、「ショート・スピーチ」、「クオート・アंकオート」のアクティビティが続く。これらはいずれもstoryの内容やトピックに関して自分の考えを述べたり、提示された問題に対して解決策を提案したりするもので、4つのCの「思考」の中でも分析・評価・創造といった、高次の思考を要求するものである。また、これらのアクティビティはいずれも他の学生と関わりながら進めてゆくもので、4つのCの「協学」が求められる。このことは、地球市民学科のDP5（言語運用能力）のみならず、グローバル社会が抱える問題を解決するために、他者と協働する関係構築力を卒業生に求めるDP2や、創造的かつ具体的な解決策を提示する創造的思考力を求めるDP3をもカバーしていると言える。以下に、「ディスカッション・クエスチョン」、「ショート・スピーチ」、「クオート・アंकオート」の例をあげる。

Global Citizen and Environment の Lesson2, Global Warming のディスカッション・クエスチョン：

1. Changes that happen on the other side of the globe have implications for everyone on Earth. Can you think of some things that have happened in a faraway place that have impacted your life? What were those events and the impacts?
2. What are you willing to do to save trees? (阿川・鈴木, 2022, p. 12)

Global Citizen and Politics の Lesson 4, Human Rights のショート・スピーチ：

You are going to make a speech on how Japan can improve its protection of human rights and human rights laws. Prepare a speech in English so that international as well as Japanese students can understand your message. You have two minutes for your speech. (阿川・山本, 2022, p. 26)

Global Citizen and Religion の Lesson3, Celebrating のクオート・アंकクオート：

“I envy those Hindus and Buddhists who have in their religion philosophy and ancestor worship which build in the believer a continuity with the past, and that most important ingredient in the building of a nation - memory.”

– F. Sionil Jose, Filipino author, publisher, and lecturer on cultural issues

1. Why do you think the author of the quote envies those people?
2. How does ancestor worship build a “continuity with the past”?
3. How does memory influence or impact the building of a nation? (阿川・辰巳, 2002, p. 18)

Story 執筆時と同様、アクティビティについても最終版に至るまでには見直しや修正が必要だった。アクティビティへのコメントは主に SLA 教員がおこなった。コメントの多くは作問の仕方に関するものであった。例えば、T/F 問題文の中に必ずしも story を理解していなくてもこたえられるヒント（例：every, all, only といった語）が含まれていることを指摘したり、story の文をそのまま抜き出して問題文にしないように指示したりした。その他、使用語彙や構文の難易度や、1文の長さの変更を依頼するケースもあった。

## 6. 2. 5 コラム

キーワードの中には、日本語の定義を見るだけでは理解が難しいものも含まれていた。また、story の中に全てのキーワードが含まれていないことから、難易度の高いものや複雑なものについて、コンテンツ教員が日本語で解説するコラムを執筆した。コラムで扱うキーワードの候補は、地球市民学に疎い(すなわち学生の立場に近い)SLA 教員が提案した。

## 6. 2. 6 編集等

原稿完成後、SLA 教員がレイアウト調整や目次等の作成などの編集作業をおこなった。英文校正は外部ライターならびに英文校正サービス会社に依頼した。編集が完了した教科書は学内の Learning Management System (「学びの泉」) にアップロードし、受講学生がダウンロードして使用できるようにした。

## 7. 成果と挑戦

CLILを取り入れた教科書開発によってもたらされた成果はまず、地球市民学科のユニークなカリキュラムに沿った英語教科書が作成できたことであろう。この度教科書を開発した3つの科目はいずれもグローバル社会系に属する英語科目であり、「英語で」学科専門科目を学ぶことをねらいとしている。専門事例と連動したこれらの英語科目は、専門事例の「入門科目」として学生がコンテンツを学ぶと同時に、学生がこれからのグローバル社会を主体的にアクティブに生きるために必須の英語力を培うことをねらいとしている。CLIL教科書の大きな特徴である「内容と言語の統合」により、上記のねらいに照準をあてた英語科目の運用が可能となった。さらには、この度開発した教科書において、各単元の後半に学生に高次の思考を求め、他の学生との協学を通じて学習を進めてゆくアクティビティを設けたことにより、学科DP5（言語運用能力）のみならず、グローバル社会が抱える問題を解決するために、他者と協働する関係構築力を求めるDP2や、創造的かつ具体的な解決策を提示する創造的思考力を求めるDP3もカバーすることができた。新カリキュラムにおいて地球市民学科生は、2年次後期以降に英日両言語で学科専門分野を学び、主体性を持った学びを深めていくことが期待できよう。

次に、コンテンツ教員とSLA教員という専門分野の異なる2者が協働したことにより、内容的にも言語的にも質の高い教科書が作成できた。従来、SLA教員から見ればコンテンツに関する教科書は単なる「専門分野の入門書」であり、語学習得を狙いとする英語教育用教科書としては機能しづらいという考えであった。一方でコンテンツ教員から見れば英語教育用の教科書の一部にはデータの扱い方に疑義があったり、ややステレオタイプの視点からコンテンツ内容を捉えたものが存在し、そのような教科書の採用を見送ったケースがある。この度、コンテンツとSLAの専門家が協働したことで、これらの問題が解消された成果物が得られた。また今回は、外部のライターに業務の一部を発注したことにより少人数の教員であっても教科書開発が可能となった。難易度の設定や作問の仕方など、何度もフィードバックをおこない、修正を求める必要があったものの、総合的に見れば教員への負担は軽減された。今後はこの成果物の教育的効果を検討していく必要がある。

一方で教科書開発の過程では困難も味わった。ひとつはやはり、多忙な教員が教科書開発に携わるには、ある程度の覚悟が必要だということである。外部ライターの助けがあったものの、教科書によっては当初のスケジュールを大きく外れて、後ろにずれ込んだものがあった。通常業務と教科書開発の両立の難しさを実感したところである。

今回の教科書開発は、大学からの教育助成金や学長裁量予算など、複数の資金的援助を得て可能になった。しかし、資金が十分であったかという点、そうではなく、限られた資

金のやりくりには困難も伴った。結果として、視覚資料の拡充とリスニング教材の追加、教師用指導マニュアルの整備が、将来の課題として残されている。

## 8. おわりに

「Global Citizen and Environment」、「Global Citizen and Politics」、「Global Citizen and Religion」の教科書は、コンテンツ教員と SLA 教員という異なるバックグラウンドを持つ専門家同士の協働で完成し、地球市民学科の複数の DP をカバーする英語教育を可能とした。教科書で取り上げる内容、言語の両面において、それぞれの専門家が確認をおこなった教科書だという面でも価値がある。また、外部リソースを上手く利用することで、少人数の教員で、複数のオリジナル教科書を完成することができた。

Environment の教科書は 2022 年度前期、Politics と Religion は 2022 年度後期から授業で使用されている。今後は、これらの教科書を使用した授業の教育成果を検討すべきであろう。このためには、実際に教科書を使用した学生や授業担当教員の反応を知る必要がある。学生と授業担当教員からのコメントを得て教科書を改良していくとともに、既に問題点としてあがっている視覚資料の不足やリスニング教材の欠如を補っていくことも今後の課題である。

## 謝辞

「Global Citizen and Environment」、「Global Citizen and Politics」、「Global Citizen and Religion」のオリジナル教科書開発は、2020 年度清泉女子大学教育助成金（共同研究）、2021 年度清泉女子大学教育助成金（共同研究）、ならびに 2021 年度教育・研究充実のための学長裁量予算を受けておこなわれた。

## 注

- (1) 1 年次の必修科目「基礎概念」で取り扱う「グローバル・シティズンのための 101 のコンセプト」は、こうした発想の転換が反映されている。
- (2) 既刊の CLIL 英語教材が扱う内容には、SDGs、現代社会 (Changing World)、国際問題 (Global Issues)、体のしくみと働き (Human Biology)、科学と数学の基礎 (Basic Science and Math) など様々なものがある。
- (3) 外部イラストレーターにはリーディング・パッセージと関連のあるイラストや、内容理解を確認するアクティビティに使用する図や絵を担当してもらった。教科書の開発進捗と予算の関係から、Environment の教科書開発にのみ関わってもらった。
- (4) キーワードが初出時は、単元最終ページに英日で示してあることから、[語彙]アクティビティには含めなかった。ただし、既出の（過去の単元で提示された）キーワードについては「語彙」アクティビティに含め、重要語彙を繰り返し目にするによる定着を図った。

- (5) 先に開発の始まった Environment と Politics については、セメスターが13週であることから、13単元を用意した。その後、1週間で1単元を終わらせることが難しいことが明確になり、Religion については10単元とした。
- (6) ここに示した理由のほかに、3つのうちの1つのアクティビティをSLA 教員が作成することで、低予算で教科書を完成させるという意図もあった。

#### 参考文献

- 阿川敏恵・鈴木直喜 (2022). Global Citizen and Environment. 清泉女子大学文学部地球市民学科
- 阿川敏恵・辰巳頼子 (2022). Global Citizen and Religion. 清泉女子大学文学部地球市民学科
- 阿川敏恵・山本達也 (2022). Global Citizen and Politics. 清泉女子大学文学部地球市民学科
- Anderson, L. W., & Krathwohl, D. R. (Eds.). (2001). *A taxonomy for learning, teaching, and assessing: A revision of Bloom's taxonomy of educational objectives*. New York: Longman.
- 朝日新聞 (2022, 3月31日朝刊). 「ジョブ型雇用、模索中:「日本型」変えたい企業・人減らし?不安も」
- 小西友七・南出康世 (編) (2001). 『ジーニアス英和大辞典』大修館
- 佐藤浩章・山本秀樹・山本達也 (2021). 「コンセプト・ベースド・カリキュラムとその指導法 — その理論と実践事例 —」『大学教育学会誌』, 43, 2, 109-113.
- 笹島茂 (2011). 『CLIL 新しい発想の授業 — 理科や歴史を外国語で教える!?! —』. 三修社
- 清泉女子大学 (2022). 『Seisen University Campus Guide 2023— 向き合うひとになる。—』. 清泉女子大学
- 竹内理 (2007). 『「達人」の英語学習法 — データが語る効果的な外国語習得法とは —』. 草思社
- 渡部良典・池田真・和泉真一 (2011). 『CLIL (内容言語統合型学習) 上智大学外国語教育の新たなる挑戦 — 第1巻 原理と方法 —』 上智大学出版

付録 外部ライターへの CLIL 教科書開発説明文（一部抜粋）

清泉女子大学 地球市民学科

CLIL(Content and Language Integrated Learning)「内容言語統合型学習」教科書開発

（略）

**I. CLIL の基本的情報**

目的：

- 言語と教科内容を同時に教えることを目的とする。
- 必ずしも母語話者のレベルではなくても、目的と場面に応じて必要な言語（ここでは英語）を必要なレベルで使える能力の保持を目指す。

原理：

（略）

**II. ストーリーと視覚資料をご用意いただくにあたってのお願い**

上述の CLIL の枠組みにそった教科書開発を実現するために、ストーリーと視覚資料をご用意いただくにあたって、以下のような点にご留意いただけますと幸いです。

- ストーリーは、オーセンティックな内容のマテリアルに手を加えるなどして使用する。  
オーセンティックな（語学学習のための教材でない）素材をもとに、学生のレベルに合わせて書き換えをしていただければと思います。書き換えにあたっては：

- 1) コンテンツの難易度が低い場合、インプットを単純化するよりも、複雑化/詳細化させることに重点を置いてください。

難しい語彙や文法を医避けて、より簡単な単語や文法で代替する単純化は、ある程度必要ですが、あまり単純化しすぎると言語習得の機会を失ってしまう可能性があるとともに、伝えたい意味内容も薄められがちとなり、内容学習の上でも自ずと限界が出てきてしまうことが考えられます。そこで、

- ・ 頻度の低い語彙や専門用語などを使う時は、同義語、定義、具体例などを与える。
- ・ 抽象的な概念については、具体的な例や比喩などを添える。
- ・ 重要語や概念は繰り返し提示する。

といったように、ストーリーの中において可能であればインプットの言葉自体は変えずに、それを補足説明する情報を足していただくなどの複雑化/詳細化をご検討いただけますようお願い致します。

- 2) コンテンツと言語材料両方の難易度で、学生への認知負荷を調整してください。

学習内容が高度で難解な場合には、言語は単純な語彙や文法構造を使用していただいても構いません。このような場合はまた、ストーリーの前の重要語彙の部分に、語彙の意味（の選択肢）を日本語で提示することも可能かと思えます。

逆に学習内容がシンプルで分かりやすかったり、学生がすでに背景知識として持っている内容の場合は、上の 1) でお願いしたように、言語的な負荷がある程度多くて構いません。

（以下略）